

宇宙旅行みたいなライブに行った日のこと
文：黒田 かや

2026年3月25日水曜日、徳島県那賀町木頭の柚冬庵 cafe くるくに泉邦宏さんのライブを聴きにいく。

高知県西部の四万十市から会場への道のりは四国の南側を西から東へ200km ちかく横断するような形で、道中は高速道路がないところがいっぱいあるので、たっぷり4時間以上かかる。せっかく時間がかかるのだしとのんびり向かうことにして、南国市の鯖と煤ですばらしいカレーを食べ感動したり、香美市のアンパンマンミュージアムにてやなせたかしさんのまっすぐなテキストと高知の情景と色彩が詰まった絵に触れ涙をぼうぼう流したりと自由な寄り道を展開した。

3月下旬のその日は小雨が降っていて、野山は桜がほろほろと咲いている。剣山もそう遠くない地域であり、なかなかの山の中だとは聴いていたけれど、会場が近くにつれ道は木々がぐんぐんこちらに迫るようになり、まったく対向車のいないラストスパートを進み、夕方ごろ無事に到着したのだった。

さて、ライブの主催は瀬尾さんという方で、出会いは2025年12月チューバ奏者の高岡大佑さんのライブを聴きに高知市の十月を訪ねた際だった。ライブは、高岡さんの即興演奏、終演後の交流含めすばらしくて今も大事に思い返す一日。瀬尾さんは、マッサージ屋さんであるとともにパフォーマーでいらっしゃる。神戸市の「音あそびの会」

にも関わりがあり、音楽家の方達と一緒にさまざまなライブを企画されているとのこと。即興に深い関心を寄せていて、わたくしの即興の会にもお越しになり発想を助けてくださったこともある。木頭では、おうちを住みやすく整え食を大事に暮らし、集落の素敵な図書館の司書さんを合間時間にわたしにつないでくださったたり、土地のお祭りで仲間とチンドン屋をやった話を楽しそうに聞かせてくださったりと、地域の文化や伝統とご自身の好奇心が瑞々しく共鳴していることが感じられる。わたくしは以前、泉さんのライブを大分県日田市で耳にしたことがあり、暗闇でびかびか光る機材、サクソと電子音の縦横無尽の音楽、新感覚のステージに刺激を受けたことを覚えていた。四国でも、新しく出会った瀬尾さんとのご縁でまたライブを訪ねることができて嬉しくて楽しみだ。

さて、話を戻して当日。雨がいろんなグラデーションで強くなりすぎず降るなか、くるくにじわりと人が集まる。近所に住む方や子どももいて、なんだかいいチームのような客席が芽生えた。瀬尾さんお手製の料理や、個性派の日本酒たちがカウンターに並ぶ。瀬尾さんの敵かな儀式のようなサクソによるオープニングアクトを経て、客席に女の人が多いから…とハート形のレンズのサングラスをかけてステージに登場した泉さん。ギターの弾き語りからライブは始まり。

最初の曲は、春がきたー／と繰り返される、いまの季節にぴったりのうた。ほのほのまじまじ聴いていると、先ほど歌った泉さんの声がそっくりそのまま登場し、ステージでは泉さんが別の動きをしているのでそれがループであることがわかる。どんどんループして新しいことが起こり続け、育ったりパチンとはじけて消えたりぶわーんと歪んで飛んでいったりする。気がついたら壁も床も天井も外れて別の世界に連れて行ってもらえているような音楽だ／というのが大きな印象だった。

どんどん新しく不思議でたのしい音楽が生まれまくり、複雑だしとてもカオス、だがなぜかそれらはすごく美しく調和していて、なんだかとてもつよいバランスを感じる。

うたのモチーフは、親しみのもてるものが多い。おいしいご馳走の賛歌や、ちょっとどうしようもないほやきやお酒の歌とか。さっそく子どもが春が来たーと真似をしている。子どものような気配はずっとして、ご自身で作成されるアルバムも、泉さんのお子さんが似顔絵を描いたというデザインのものがある。弾き語りの人になりたいんだよね、と仰る泉さん。かつてよく一緒に演奏されていたという故鈴木常吉さんのカバーもあり、「思ひで」は春の雨ににじむようなじーんとするお歌だった。たくさんだしたけど（楽器を）ぜんぶやるかわかんないなあ、と尺八を尻目に洗濯ホースを手にとり、いろんな音を出しどんどん拡張していく音楽もあった。笛も道具も、泉さんの前では命が急に灯ったみたいにいろんなうたをうたいまくる。

泉さんはフランス語や演劇をやりたいくて進学、ジャズ研に入ってサクソを選び、フリージャズに惹かれ、渋谷からズオーケストラのメンバーになったとのこと。海外ツアー出演があり、脱退があり、お引越があり、山梨を拠点にソロで全国をツアーする現在の形にいたったそう。コロナ以降は1週間に1枚ずつミニアルバムを出して、作曲や演奏のほかジャケットもご自身でつくる。もうそれが5年くらい続いていると仰るので一年がおおよそ52週間として260枚はアルバムを出していることになる。アルバムの内容は、尺八やうた、サクソのほか、ガムランがあったりもするようで、やっぱり一人の人間とは思えない引き出しや宇宙的なクリエイティブが広がっている。／と感じる。こんなに器用すぎるのに人間くさくて親しみやすい面も、ふしぎなバランスでもっともっとお話を伺ってみたいくなる一因だ。

本文章を書くにあたって瀬尾さんの泉さんライブの投稿を見返してみたら、「毎回違う音楽なので説明が難しい」「究極にオリジナル」と綴っていた。8月雑眼は、太陽の眼の空間と泉さんの音楽は合うのではと思ったことが発端だ。今回も発明のような一日になるのではと今からわくわくしている。音楽が大好きな人、自分も企画や演奏で携わるひと、いろいろな人にぜひお届けしたいと思う。

くるく